# Hello, My Better Half

■ side–Black ■

無邪気な笑顔で母親の手を引っ張り、ちょこまかと動き回る少年は幼稚園くらいだろう、テレビのヒーローよろしく足を振り上げたかと思うと上体をぐらつかせる。若い母親ははいはいと、その姿を見守り、彼の妹か弟らしい乳児を寝かせているベビーカーを押している。上天気に相応(ふさわ)しいあたたかな光景だ。黒子は微笑ましい姿に笑みを零し、彼らの数メートル後ろを歩いていた。そして駅のロータリーが見える信号で追いつく。バスやワゴン車が横切り、道路からはみ出さないよう母親に身体ごと押さえつけられる少年は窮屈そうだった、そんな元気さがいい。隣に立つ老人に声を掛けられてびくりと姿勢を正し、敵から守るようベビーカーを抱えるところも好感が持てる行動だった。すぐにそんなことにも飽きたけれど。

携帯電話にメッセージが入り、黒子は歩道の端に寄って返事を打つ。

遅くならずに相手の用は済んだらしい。さて、自分も向かうかと前を向いたところで子供の泣き声が聞こえた。目の先、左方向は改札のある上階までのエレベーターが設置されており、先ほどの親子連れが待っている。母親は困ったように携帯電話を耳に当て、何だかよく分からないけれど乳児が不満を訴えて泣き、兄は兄でそんな母の気を引きたいらしく、ボタンを連打していた。母親の手は限られており、幸せそうだったはずの顔は強ばり、どこかぼんやりしている、彼らの前にドアを開いた箱は無人だった。黒子は駈け寄り、無情に閉じられてしまわないよう手でドアを押さえつける。

――ガタッ。

「あ…」

「平気ですか？」

乳児を泣いたままにベビーカーを押し遣り、機械的に息子の手を引く。よほど衝撃的なことを聞かされたのか、心ここにあらずといった風で、接近するドアにも気付かなかったようだ。そっと兄を奥へ押し遣り、黒子は鞄を挟まれた。母親は慌ててボタンで開き、滑り込ませて貰う。

「ありがとうございます」

「いえ、…すみません」

ほら、お兄さんにお礼を言って。そう告げる声も元気がない。兄はそれが気になるのか黒子に舌っ足らずな礼を言ったきり、じっと母親の方を向いていた。

「泣いてるよ」

「うん」

「パパどうしたの？」

「…うん」

生返事だ。母親は乳児に手を伸ばす、兄が同じように覗き込んでも泣き止まない。たかが数メートルぶんの上昇なのだが響き渡る泣き声はなかなかで気まずい。というか、母親の顔つきといい、しゃらりと澄ましていられない。改札のある階に着いたところでつい言ってしまった。

「あの、抱かせて貰ってもいいですか…？」

黒子としては割と必死な打開策ではあったのだけれど、赤の他人が、ましてや高校生男子が言うべき言葉ではない。次の瞬間には自分に呆れ、赤面していた。そんな姿を見て唖然とこちらを見返した母親は思わずというように吹き出す。ほどけた母親を見て、息子も笑う。お互いにぎこちない態度で、それでも引くわけにもいかなかったから抱かせて貰うとまだ生後数ヶ月という乳児はやわらかくてあたたかくて、やさしくもしっかりした命の重さがあった。おっかなびっくりな相手に乳児は泣くのも忘れ、これは一体何なのだろうと精査でもしているのかぽかんとしている。母親はついさっきショックなことを聞かされて気が動転していたところだったと恥ずかしそうに打ち明けると改めて黒子を見る。

「ありがとうね、取り戻せた」

ありがとうねー、と母親の口調そっくりで息子が復唱する。

「いいえ。急に変なこと言ってすみませんでした」

詳しい事情は知らない。しかし母親が笑う、それだけで少年の心が晴れやかになるのを黒子は知っている。

その後、予定よりも一本遅い電車に乗り、黒子は待ち合わせ場所に向かう。焦りはあるが気分は良い、電車の到着は地下ホームなので、地上口まで上がらなければいけない、幸いに降りたホームにはエレベーターがドアを開いたままの状態になっており、それこそスムーズに乗り換えられた。

「……」

よく見ると折り畳まれた新聞がドアの隙間に挟まっている、エレベーターはこのせいでしばらく停止していたようだった。悪戯(いたずら)なのか事故なのか、引き抜いて何気なく見てみる。昨日の日付で、一面は汚れて破れ、他のところも折れている。

「えっ…」
ひっくり返して目に入ったのは地方版、表記された地名に反応し、痛ましい事件記事を読んだ、ショックで声が詰まってしまう。そんな、信じられない、動揺してもどうしようもないと分かっていながらも黒子は動揺する。
「あ」
はっと我に返るが遅い、運が悪いことに足を踏み出す前にドアが閉まり、上下の行き来を繰り返すことになった。恥ずかしい、黒子は息を吐き、新聞を小さく折り畳んだ。
――ガタ…
ドアが開いて目に入った全体の印象はモノクロ写真だった。暗い？
エレベーターからは並ぶ改札機と、その向こうに空が見える。空はどんよりと曇っていた、暗澹たる気持ちというものを表すべく作った書き割りみたいだ、感じられる風もどこか重たくじめっとしている。たかが二十分かそのくらいのうちに雲が発生したのだろうか、地下鉄での移動だったので黒子は知りようもなく、ぬか喜びさせてくれた青空を思い出すとそんなに気合いを入れた崩れ方をしてくれなくても、と言いたくなる。
ゴミ箱に新聞を捨ててから頭上を見上げ、考える。雨催いといった匂いはなかった、しかし、なにかの弾みで降りそうではある。
雨の心配はないと言い切った天気予報が外れ、急激に雨雲が関東を襲うのだとしたら数少ないフリーコートでバスケをすることも出来なくなってしまう。崩れるのが早いなら待ち合わせ場所も変えなければならない。何しろあの場所には屋根がない。
「…あれ？」
携帯電話を取り出すと画面にある時刻と駅の古めかしい掛け時計とで違っている。そして、どうしてか不通だった。都合によりアンテナが感知しなくなりました、とばかりにいささか古い機種ということもあり、黒子の携帯電話は沈黙する。
「今でなくてもいいんですよ？」
思わず囁きかけても携帯電話は無機物らしく冷たい反応を貫き、待ち受け画面のまま発信するためのアンテナを立てたりはしなかった。
「……」
黒子は仕方がないと息を吐いて改札を出る。
時計台の方を見遣ればちらほらと人は歩いているが、目的の相手の姿は見当たらなかった。人待ちと覚しい誰かはストラップを弄っていたり、ベンチで新聞を広げていたりしている。何

が悪いわけでも不自然というわけでもないが、どこか映画のセットのようにも見えてならない。早くに情報を手に入れた人だろう、傘を手にしている女性もいた。

黒子は辺りを見回し、公衆電話を探す。売店に、自動販売機、コーヒーショップ、書店。そしてどこからかカレーと出汁の匂いが漂う。この駅は企業も多いが、学生の街でもある。携帯電話の普及で駅構内からも公衆電話が消えている。とりあえず連絡、留守番電話にでもメッセージを残しておかないと、ともう一度携帯電話を見、違和に気付いた。

「…あ」

携帯電話を手にしたまますれ違ったサラリーマンを振り返る。そうだ、どうしてかあの薄い板状の、いわゆるタブレットやスマートフォンを持っている人を見かけない。

「って…」

そんなことはどうでもいい。

改札を出ると半円状の形になった階段が設置されてあり、やや広く取った歩道と交わる。柵の向こうは一方通行の車道が併走していて、信号はなく、向こうへ渡す横断歩道が横たわっている。車道は駅前交差点で川を跨いだ幹線道と交わり、その橋のたもとに設置されているもやもやしたものを黒子は半分は希望、もう半分は推測で思い浮かべる。ぐるりと回るようにしたあの橋の、自販機と並んだ宝くじ売り場の横に確かあったような。

「電話」ありました。

果たして公衆電話は二台設置されている、思わず声に出てしまった。別に取り合うようなものでも先着順でもないのについ小走りになってしまう。使えそうなことにほっとして小銭を確認しようとし、脇をすり抜ける少年とぶつかりそうになる。黒子とて慮外のことである、自分が近付いてくる人影に認知されないのは経験から察せられたのでわざと肘の位置をずらした、ところが相手は型抜きみたいに見事に黒子を避け、不運にもそれがピタリと接触面を作ってしまった。二人であっと思っただろうが、咄嗟に手を引っ込めても手遅れ、回避できず、腕は頭に乗った制帽を弾いてしまう。

「っ！」

帽子は音も立てず歩道を転がり、少年は慌てる風でもなく拾い上げて

「あ。いえ、お構いなく」そして、被る。

一拍ほど遅れて出した黒子の手は空振りで少し気恥ずかしい。少年の態度はあまりにも堂々としていた。

「……」
「？」
手が、気付くと少年の肩を掴んでいた。まだ薄くて頼りない、自分よりもずっと。
「…あなたは？」
少年は自分を見上げると別段驚いた素振りも見せず、落ち着き払った態度で問うてくる。
「赤司、君…？」
赤みが勝った頭髪、勝ち気そうな目、顔立ちは整い、聡明さそのものを表している。容姿もそうだが、なによりも取り巻く雰囲気が彼そのものだった。
半信半疑というか、似すぎてびっくりする。彼の親戚だろうか。
「はい」
少年は返事をする。
「新しい、…護衛？　の…」
自ら言っておいてそのいかにも利発そうな顔つきの少年は訝しげに眉を顰めた。ボディガードは絶対にこの人ではないと考えているに違いない。格好でも分かると思いますがはい、その通りです。
「あ、いえ。そういうのでは…」だけに気まずい。
「もう小学生になったのだし迎えはいりません」
唐突に相手から繰り出され、何を話そうとも思いつかないまま黒子は言葉を失ってしまう。
「家から寄越されたのでしょう？　食事には遅れないようにします。今日のレッスンも時間は守るし、大丈夫ですよ」
幼い声なのに冷たくもないが、あたたかくもない。敢えて無表情にとでも念じるかのような肩肘張った様子が胸をちくりと刺す。ほっといて欲しいと、懇願からはほど遠いような言い方だった。
「ですが」
侮るわけではない、世間的にも子供なのである、いくら賢いとはいえ少年は小学校に上がったばかりでまだまだ大人の手が必要に決まっている。そうでなくても、彼には誰かが必要だと思った。
「……」
あくまでも、黒子の過去の経験的に、ではあるけれど自分の事情を押し遣って一位に据えられるほどの事案であるのは確かだった。
「急ぐので」

「えっ」
それは困る。いったいこの少年は何を急ぐのだ？
最新の測位システムだとか、そんな話ではない。いくら白昼で人の目が多いといっても危険は都市のあちこちにあって、見守る目が追いつかないのも実情なのだ。駅前だからとかそういうことは分かるけれど、どうして一人で彼は駅を通過して行こうとするのだろう、と疑問視して良いではないか。
「ま、待って！　待って下さい！」
背を向けて駆け出そうとする少年を捕まえた。
「交通量も多いし、低学年は集団下校です。でなければ一人の下校は学校が許してくれないはずです」
黒子にとっては不自然が転がりすぎているようなこんなところで安穏と見送るわけにはいかない。だいいち、登下校の付き添いは地域の保護者達が率先的に行っていた、はずだ。そういう町内会の通知を目にしたことがある。不埒な輩の起こす事故だとか物騒になったものだと頭の片隅にあったから彼の通う学校でも安全策はとってあるだろうはずだった。
「……」
少年は居心地が悪そうに身動ぎ、どうして、と呟くように言った。視線を落とすと名札にフルネームが縫い付けられているのに気付く。
「あか、…征十郎君」
はい、とどこか返事は反抗的な色合いを帯びている。
「逃げないで下さい、傷付きますから」
相手は答えなかった。
「ボクは君を知っています」
「僕は知らないです」
「……」
ものすごくさっぱり言われたから続かない。
投げたボールを惚れ惚れするようなフォームで場外に打ち返されたような感じだ。とにかく、と言おうとしてすうっと音もなく車が横付けされたことを知る、動き方がまずかったのか、呼ばれたと思ったらしい流しのタクシーだった、黒子は思わず子供を抱く手に力を込める。首を横に振り、乗車する意思がないことを運転手に伝える。
「えっと…」
まず、訳が分からない、それに緊張してか、手が震えているのが分かる。
誰かこの状況を説明してくれないかと叫んだところで空間を割って親切な人物が登場してくれるはずもなく。